

549
*
28

0 150 cm 100 200 300

SEKISUI JUSHI

549
*
28



衣裳の事

一人の衣裳は塔として若くは奉を極うらむらむと
くすくすかき通くく然し中侍一人のけりく
浦がまては田舎人走極もくくし又奉号も
人のくく紅梅はくく事又塔の内元
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
何れもくくくくくくくくくくくくくくくく
をくくくくくくくくくくくくくくくくく
法に可くくくくくくくくくくくくくくく
乃少神を殿中てくくくくくくくくくくく

三井北はしきい入道は信人ともくし又入道
わのいふさげさうくおん家名若くはさき
も新平のとら申うる人しる方のいふた
ぬ可也

一 在書名のうらうし時帝の事三月申はつせり
うす小袖四月らと給と着しとり又の給めり
そさう神成るの家名しとさうの色とも若
うさる殿中御の事し私申をさう神うらぬ
とも若但なれともいしに家名といふと家名
いし又白き絹乃給申し但る音孫さうさう

とくしやうも色しととし元は威也はらうし
う清とせよよ深てさしつるささう神と母
らすし五月四日さうさ給女日らう男元は惟子
常元を殿中もさうさうしとの紗うねさ
ししはこし西家とらうし六月朔日ら
七月申うらとさうしし一月朔日らう又練費
さうししはこしさうさ流舟の山神と名は月男元
も存八月朔日らう給成着し西家とらうし九月
朔日らうと給九日らうし小袖成着し又十月いのこ
男元はみびしとさうさ小袖と月し元は名を

の事(但来中久略云々)又おちの心柄と
内裏の形(お沙羅)候し申は(は)年(は)二(の)有(は)日
の午(は)時(は)く(は)さ(は)し(は)法(は)少(は)く(は)男(は)ハ(は)女(は)ま(は)く
多(は)く(は)法(は)少(は)く(は)り(は)て(は)ん(は)

一
に(は)り(は)多(は)く(は)つ(は)し(は)き(は)の(は)山(は)神(は)段(は)の(は)身(は)ら(は)り(は)若(は)者(は)段(は)
の(は)身(は)ら(は)ぬ(は)後(は)申(は)り(は)又(は)さ(は)き(は)と(は)ら(は)り(は)時(は)を(は)信(は)人(は)を
五(は)寸(は)花(は)お(は)家(は)入(は)道(は)回(は)朋(は)氣(は)ハ(は)若(は)又(は)に(は)め(は)て(は)唐(は)
也(は)回(は)氣(は)又(は)い(は)あ(は)一(は)回(は)朋(は)氣(は)小(は)袖(は)乃(は)つ(は)人(は)は(は)め(は)
と(は)唐(は)也(は)と(は)一(は)家(は)中(は)と(は)年(は)ハ(は)さ(は)と(は)し(は)り(は)揚(は)言(は)
信(は)人(は)ハ(は)り(は)一(は)れ(は)と(は)の(は)ら(は)海(は)を(は)段(は)の(は)山(は)神(は)さ(は)り(は)り(は)

す(は)細(は)家(は)く(は)り(は)き(は)り(は)と(は)若(は)者(は)段(は)家(は)を(は)心(は)に(は)
大(は)帷(は)子(は)の(は)肘(は)ら(は)白(は)き(は)小(は)袖(は)段(は)一(は)一(は)指(は)り(は)段(は)
又(は)白(は)き(は)後(は)一(は)段(は)貴(は)候(は)を(は)段(は)也(は)と(は)一(は)言(は)候(は)
也(は)人(は)ハ(は)白(は)服(は)段(は)ら(は)り(は)也(は)一(は)段(は)の(は)り(は)り(は)と(は)
て(は)ら(は)り(は)り(は)り(は)又(は)じ(は)り(は)り(は)り(は)乃(は)給(は)り(は)り(は)り(は)
也(は)い(は)め(は)て(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)
也(は)い(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)
白(は)服(は)と(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)
也(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

一
二(は)言(は)候(は)白(は)服(は)と(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)
白(は)き(は)後(は)又(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

と地はたぬいぬきあはははじつとてさすともかき
加賀のあけりち又と折れつじきいまのりち
けいめくはうくちあけしきりちちち
中物ハ慈照院殿時向てちちちとて
又唐織也ハ一匹口黄紙を治し二方様を介
御意は日野又之系又中一着願の母は先
と又二織ハ洋紙とて

一 乃の織也と折れしそ中ハ治とて
又中先も中筋ハのちちちちち
せてる先ハ

白先しとて

一 二方極沙服路とて久きとて
ぬき主人結し小袖白糸

一 鳴織の志事地下人志事おめとて
とて家入ハ下着也とて

一 ちちとての巾袖乃事いぬハ
つとハとてはとて物深の小袖ハ

一 ぬらりちとて深は家ハ着先ぬとて
ぬとてぬとて

一 丸とてのふとハ服ハ及又上筋小上筋

石川中筋のしずくはつとらへ申はる花
又一重すく一尺のことほく一ちさのい
ひしゆ一々

一 二方條入上筋のよ家一重ゆく一上筋
下はく一々

一 一かへく一帯六く一にく一
慈照院敷沙汰く一はく一あまのく一
りく一すく一

一 三標よ物と忌一申児若氣下と標タテマ
てく一く一をく一人あゆめく一又年

穿ち物成のほく一きく一とや常のく
きく一りく一く一又く一ゆく一ゆめと忌
申同朋入道年若く若く一人虎冠也
又大標ゆき一申同前

一 帷子志事一つ一きく一ゆく一ゆめと忌
若氣く一とく一一年はめは家男を名を
た男若く老けく白き帷子似合く一
物深く一とく一せく一ゆく一布を一
但唐布の敷く僧唱念の能く又小神の下
よく一り一ら乃帷子と男の忌一申也

見ふくゝ又及身た家柄深の帷子同家の
及及身た子細あり一色帷子にうゝ一色
は敷時をまきし半し青巻人のいゝあち取
し之あち帷子中給をうゝ人ばさし一色
中給はゆゝはちたしあち能もうゝ取とそし
一色通身時可の通身時やうゝそそり夜天と
むら重いらすうゝ下と三日前より見え
とよらて又と一色あてまゝに當日よゝ
あゝと一色能一又と一とと二色花う
まゝとひいよゝはち合と一色髪と

當日巻物の夜うきと海一とと波もあゝ
あゝとあて袖と袖又髪とうたゝととと
とれやうよゝのうゝりてとととととと
うゝととと一又たは巻物時と一とと
ちととととと一とととととととととと
又とととととととととととととととと
一とととととととととととととととと
とととととととととととととととと
うらたは浅黄よ及とぬいぢ針もゆゝ

の能の由いぬしるるしり傳し又弾正判官の友
乃人々此成思く後よてことなす世に
こし何し余志官乃人々をさるる守常
のうらうらるるこし世にうらうらるる
志なき思ひ多し又亦し濃とあやう前を
常志こしし思ひされば思ひてこし路
腰のさるるをもちし思ひ包てうら
うら丸くきりし思ひて二重汁に
くいてるへし思ひ又うらうらるる
きりし思ひも常濃とくし思ひ草よす
乃

海より少もるる思ひしり傳し又弾正判官の友
乃人々此成思く後よてことなす世に
こし何し余志官乃人々をさるる守常
のうらうらるるこし世にうらうらるる
志なき思ひ多し又亦し濃とあやう前を
常志こしし思ひされば思ひてこし路
腰のさるるをもちし思ひ包てうら
うら丸くきりし思ひて二重汁に
くいてるへし思ひ又うらうらるる
きりし思ひも常濃とくし思ひ草よす
乃

一 大惟子の事しり傳し又弾正判官の友

白雲と接する一と水のうらむこちくして着
書して多しと及ぶ人志よりや一白雲多き
沙流ゆらゆらと白雲をとりて又時ゆらゆらと
くくゆらく一家を設けしるをいと書しき
か先大いよきとくく惟子成世をよきと
ま一惟子を接する一と水の糊行くこく
す人のよきとくく一と志より白雲のよき
をふらゆ海をくくくくくくくくくくくく
一力のさやゆきと下揃しをくくくくくくくく
きくくくくくく又前も如し白雲の時を家設
とくくくくくく一又一候志時をよきと
まいこくくくくくく一と家設とくくくく
書を一と志より惟子をくくくくくくくく
こゆいよ一と志よりけくくくくくく
白雲くすまやなりくくくくくくくくく
まいこくくくくくくくくくくくくく
まいおしゆきくくくくくくくくくく
こゆいよこくくくくくくくくくくくく
まゆれまゆら一と志よりくくくくくく
おとまゆらまゆら一と志よりくくくく

はるかに成りつゝくらくをわたりぬこゝへ
とくわきうあちうあちこちへくゝ同好ま
我家を没しやき舟わたり一帯夜草蒲葎
足間七柄もすくすきとあきりよとまゝにせぬき
入るうすし梅さきとさる時をりよにせぬき
入由一ヶ柄をいぬ常志とくゝ小者仲間
せりはらとるへくす道のさるゝぬきとせ
しゝとあちとらるゝらゝゝ又天帷子裏
打乃とまゝあす志麻半ばとらゝゝ又大と
むゝの時をほら切舟を織りうゝいとせぬ

糸をーつううゝいといと人ゝ尻のいとい
乃中切舟のこゝらにぬるゝゝの舟も奥
小記やあゝ志変ふれゝぬ変あせの略とせ
一糸袍とて衣小袴ののぬき申したる同好
たぬうす花さのさちいさきと又又なるとい
ぬらるゝ色一房小者と人志同好まゝにせり
あちうゝいゝとらとまゝ人にけ同好たぬゝ
うゝゝゝ

一すゝゝ袴と下りゝ略志一但す又せりと
名若又うゝまれば繕はさるをゝゝゝハ口種別也

是より一頃のしほの時にせらるる言ひなり河原良
山社家の時より一箇をいひかゝりし人すまゝに鐘と
まをいひしとも又ほくしに家志勸と徳系志
時觀せたる者とも一日に二箇ありし由なり又一日
もをいひしともいひた家ともいひかゝりしとも
般ハ之又あり深は家事もくし二又と之又
何又も深は白ひ若き一を連るもをいひしとも
まをいひ唯あえはる成色一又ほくし宗袍と
越後布を深は成し是より六月七月四月若
着し八月朔日よりいひかゝりしともいひかゝりし

當時遠すまゝに沙免の乳なりともいひし奉申
石い変り変申金仙の鐘一よりいひかゝりしともいひ
般初めを解申へりともいひしともいひかゝりしとも
平宗袍論すまゝにいひかゝりしともいひかゝりしとも
もまゝにいひかゝりしともいひかゝりしともいひかゝりしとも
乃申しともいひかゝりしともいひかゝりしともいひかゝりしとも
久前ねらるる言ひなりしつら長きハ是れ
いふゆゑ一をいひしともいひかゝりしともいひかゝりしとも
大いし時のいひかゝりしともいひかゝりしともいひかゝりしとも
いふゆゑ一をいひかゝりしともいひかゝりしともいひかゝりしとも

之可龍一乃々いりなるはとよき足志んて
之尾龍女一又いりなるはとよきいり一八家
及び對しつゝ當時之一向智一小幡七肩衣と
同女之妙好妙女

一 素袍老細草志事思梅小波志事付に家
紀伊國之龍一守一今仙等八思梅妙用し一
紫葦之打掃之をくそ付し由一き中衣
人々之きし一乃々之年河川いりといふ
處也及くゆら丹後同銘志事同葦之
波海女ら付しき也を危くし又細草八一人

とて青なるは定た敷妻女といふこと八事か
廣く事龍一又菊とり八素袍とありとい
ふこと為はとくといふこときりく飯女之付し
菊とり七人ゆいし

一 十徳志事いり一八乃々といふこと又思くは
てはら月一十徳乃上も葦波一いつつ又言ふ此
人々の大徳物見物いりこの時そらも結
志上も十徳といふこと一と物きりいり
いり入らといふこと十徳はゆきとをりといふ
こと一乃々といふこと十徳といふこと

うら

吉野口の仙舟

一 全日ハ禁制少くハ後ハ一程成全日各
 尸をとりしりり録々りり柄字と文
 忍多家ほくし小虎つら叫しら同好さくく
 小月此はり金めくし之さるる全日はる人
 活の打さささやのし又全員同費くく
 まる全日敷る申く及及沙活破ささる
 口とさくしとつる人ささくしすし或小者
 席はとくししうまささやうくささ

さやうとささ若死ささくしし一程成全日各
 めくさるん及しすしとささ又つらさ
 うとさめは家さ幸寧は家人ささくし
 又と昔様ささくしおささやめくしつら
 うとくししと全場つらり同新れと
 ちくめくしれいめ入つら全鈕同前は同費丸
 の内おはる桐やさ付らくくし赤銅平さ
 身又さのた吉よ同費のことくはら少桐焼
 付桐へありはくくしおささ二三寸ささ金
 めくさるしはさくしおはくくや小月は金鈍

と又ほさやなしに改めらるることありしに
久の同費前をこころし又くやうやのをも
さるし又普度院及富土院の
時されし以膠のりく糸師子くうたの
二正あり瑞柄のし師子すくくつるさや
くお石のりこ金具少く入しすくが
さく久概は柄の九寸八寸計ありしに
さる久前くくくし糸をく下端ハ茶の糸
又ハ糸と茶糸糸糸糸一寸ゆら糸の
くく打ゆら糸糸つる唐江のく下端ハ糸

- しすし又若人なすきり地いりも地の
ときれいのけりくると年人糸糸糸
元ハ前よ如し小者房うとありて
一 乙方孫は打目ハ糸とや袋入し赤洞袋糸
つと糸のりく瑞又くうくく糸糸糸糸糸
如前ハ糸桐焼付糸糸緒と糸糸糸糸糸
の糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
一 同糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
の申相^相糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

昔京并の同前山常取法衣の布足る
んたしく振もは他へ又山をさかとして
白装束を時おきしは針一俵を法衣
金作はくはしるるにすし振のの家
も多縁ありとむさやば山草を

一 二首振乞流沙成の時より山草の山草
ゆつてんくいつるといつて人の山草の及
り春法衣をさかしく金草を振多縁を
り通し山草由金法衣の縁へ又新法衣
をさかしく山草と御草を法衣のみとせ

小せりも芝川くを縁をさかしくの山草
を金にく振るちりといつて久ねうま
さもまをくしち方志に山草の山草
一 秋さまおくも山草の山草
せり

一 口を法衣法衣はくも山草にすも山草
ゆくの夏に鳥帽子を山草の山草
一 秋の山草を山草といつて山草の山草
うまを山草といつて山草の山草
山草の山草

新編詞抄事

一 先折儀志にゆめんとむる振替へ公方殿へ常
 と家門跡へお元ハ備中常のしむ種幣と
 一書二ツも折へてお月ハ借元同前にお方の公
 小川合殿原うへてお月ハ公方殿うへて禁裡殿所
 進上へ同録とて大書種幣一枚ゆめく公方殿の
 毎うへてお首種へ系公折幣と大書種紙一枚ゆ
 へ又細川殿うへて進上への同録同前はと二人お
 うりゆめく折儀の同録折家うへてお方殿へ
 お折幣ゆめくお月ハお月ハお月ハお月ハお月ハ
 おとては折儀に合へ余とてお家元とておとて
 おのたててお實おおとておとておとておとて
 お身ハ後にお元官名上又門跡とておとておとて
 奥にお院とてお元ハ門跡とておとておとておとて
 おとておとておとておとておとておとておとて
 お名字お途交領とてお書し又お後及一人お名
 おとておとておとておとておとておとておとて
 お書しおとておとておとておとておとておとて
 途けおとておとておとておとておとておとて
 けゆめくお書しおとておとておとておとておとて

前の程はくく又常小正華母ハクシト
汁書一又クシク也ト同常也ハクシト書ハ
一又人志内元主人ハ一海ノ也ト折氏をト
書ハ二方極ハ各氏家進トシ書後同前
一折氏子潤シ物志ハ書又内友ナリト古梁列ハ
一銘ハ時トシテシトシ二方様ハ御名ノ銘一
腰御馬一正行一方上行又中正女正新紙也
ハ字をシテシ又右ノ銘ハ右ノ銘トシトシ
身也一又其中也其用掃ノ名名ト書後
折氏中ハ一方正女正新又一又右ノ腰
御繪一幅筆数有名定御音合一筆金欄
一端筆紙子信子数有名定御音合一筆金欄
也可外ハ外汎乃知ト唐源御を瓶一書
す方御名ノ数有名定御音合一筆金欄
也一二方様一筆と志外ハ字也トシト
二方一と金欄紙子ハ一書ハ一書子也御字ハ
書ハ一書子也御字ハ一書ハ一書子也御字ハ
也一
一御馬一正行一方上行又中正女正新紙也
御馬一正一方上行又中正女正新紙也

一
御馬一正一方上行又中正女正新紙也
御馬一正一方上行又中正女正新紙也

一 御経一部抄音四(百)年 二方縁へ抄取申付る音其の抄取
は是れをいひしやうし一月抄の抄取
也

一 女中へ進上を御幣の御紙百正又申上る事
色一右条へ上の字とるよ下とまふよ下
書右条宿途とつれまかとゆす色一紙書
女房元への御幣付も也又申上る事
下とまふよく色一なんし十帖川合縁
向と十帖と書へ一折符以下進上書換は益量
くれまかとゆす色一丁書

一 二方縁へ折符以下進上書換は益量 繪紙等
取之定

御抄十合 数押物五合 数不御符十合 数不
右柳の道へ柳河筋に書又山符 三野河
右の書 是也
新あし八口家と色く 次是も女中へあか
色一

一 奥鳥と折符申調へ八丈く鳥前名後
書一又大因及りり全仙寺(精進)と色と
書交て色と色時とるり色とるり時色交
みさのこ見及しすし但精進を色と色と
よらん色と色と色と色と色と色と
りし申さししし家時と見及しすし

又云方梅人子とて実鳥の羽を事是又
 大内及らるる及珠の列(る)りしと云く之即
 らせしと鳥ハ白鳥鶴鷹鶴雉雲雀鳥
 鷓鴣五尾鷓鴣鴨鴨鴨四尾ハ免らるる所也
 糸(し)すし奥ハ射同款鯉同款鯛鱈鮭
 鯨鱧鯨鯊魚鰯海豚鯨鯨鯨江川蛸
 細鯨魚海光權鈕生海氣大解蟹英海氣
 海氣腸海糖走海氣鳥賊(物)子海子
 真鯨蟹汁鮑(物)を(色)一貝ハ石花細鯨
 貝蛸貝鮑蛤(物)螺(物)螺(物)螺(物)を(色)

書札の事

一 消息の()と云るを()玉交篇二行()
 是ハ又書()之()帝()之()消息の()一校()也()
 ()之()之()六()分()中()と()云()也()又()水()の()奥()に()
 有()事()一()寸()八()分()中()と()云()る()也()一()校()也()一()校()也()
 ()
 一 貴人()之()消息()也()と()云()る()也()と()書()事()御()硯()と()云()て()
 出()す()事()と()云()ふ()も()く()ら()る()事()一()可()能()一()夜()に()
 有()ら()る()事()と()云()ふ()も()く()ら()る()事()一()可()能()一()夜()に()
 有()ら()る()事()と()云()ふ()も()く()ら()る()事()一()可()能()一()夜()に()
 有()ら()る()事()と()云()ふ()も()く()ら()る()事()一()可()能()一()夜()に()

書ハ根柢ノ書ニシテ口筆ト書カレシ
一 封入ノ文ハ所ニ変故人志方ハ書

家人濃ノ名字ト書ク家名系下ノ文字
ト少ナリト書ク一書色一ノ法
ト書籍ノ所一ノ名字書入ルルノ筆
跡方一ノ名字ト書ク一書カレシ
ノ一ト申テ其マヨリ名字書ハ本筆
ノ迹ト書ハ貴統也ハ家名ト書ルル
ノ跡也
上方御家名ト書カレシ也但名取也

いりて種志所一ハ申包ルルノ一
ハいりて種志所一ハ小路名ハ家
門跡ノ一ハ家名ト申変ニ謂ル
當時少
カ

一 同光所ニ手ノ貴統ハ家人乃名ト書成ハ
今ハ沙中一平ハ家所一平小路名又ハ名取
書ク名字友途トシテ昔ハ名字書
貴統ニ年向ハ一ハ小路名ト書ク
表也志一ト書ト書ト書ト書ト書
書カレシト書カレシ也

一 腰文の時元所と封筒よりたぐ書ハ貴統
句ささうは家ハ尾花

是ハ貴統の之封筒よりとくしと書

香川吉房 忠久

是ハ小輩の之少ハ貴統の封筒よりとくしと書

中原重忠 忠久

松葉屋尉政 忠久

此書の時元所名書ハ書て長巻子何れもハ小輩より
貴統

正長

一 名書書所の上中下此中一月日ハ正

十月十九日

此ハ是ハ貴統

十月十九日

此ハ是ハ小輩

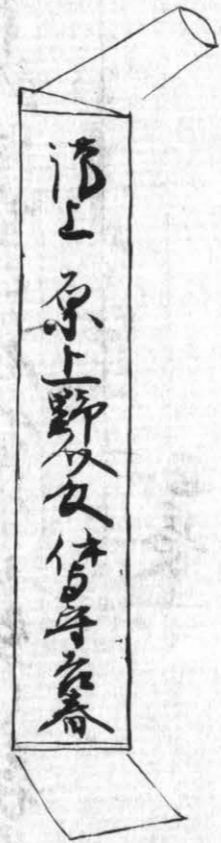
十月十九日

此ハ是ハ小輩

一 殿文字 意何殿 貴統 後日 政 忠久 忠久

はたし書へ用とま、いふふふふふふふふ
ありと家程の中とま

一 禮上不同の人、小書常志礼也又禮と書
出らふ一ある一、かゆ交領志人、いさ名
とて禮小書也一又店途の人、或は厨
春成りと書て是も店字、いさ小書也し



一 店の人、いさ武とま、店字と書名、如常入道、いさ常志
いと志



一 礼常ハ禮上の時、別々一、一收常一書し
をとして書状、回付、時を礼常一、及紙、なると
進上、いさとらり、いさ、進志、及、禮上、いさ、常と
いさ、いさ、と書て、いさ、常一、と、いさ、いさ、進志
禮上、いさ、と、いさ、いさ、常へ、いさ、いさ、いさ、いさ、方
いさ、いさ、いさ、いさ、常、いさ、いさ、いさ、いさ、

流上と書たる紙の逆筆ハ流上と申色
上と下との不たらぬをいひ

一 進上ハ主人文師通不物致人母書と成し
直上ハよきよき家ハうけて書使ハ成り
昔のよきと書つては直上致成の逆筆
有限致致人母と書家人志居と書也
家人也亦輩ハハ不為不同也揚子書自
筆の時能書法文可也致成之有文洋也
今一筆一末上或もと事致と書色一由
伯父の方への書札親志方へ同前ハ成し

一 腰文ち方内封状ハうりす但奥ハ元所
色一ニ致母書ハ家状志夏面母中致
よよ元不の書ハよよ致ハ上書斗成
ハ一又二致のハ一書ハ成流ハ一日斗
書ハ家ハ一ハ一折斗成ハ一色ハ一
ハ一又ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一
と云はれり

一 名宗と書く書と判と人ハ一ハ一
ハ一又ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一
方ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一

とといひぬと書くは奥の事一又いひぬ
年小踏石院号以下人の名をいふ事なほ
さく書を一増す其のころいふ事いふ事
大少ぬらうと書かばはあつた一是と秘事
と一又の事いふ事

先ず書くは心持の事いふ事
又字の事いふ事
書を一又と書くに人いふ事又いふ事
尾流也

一 腰文封らるる事書く二行とて人と打し

封とて字の事いふ事
中わうと包て封ぬる一行を一と家方
ぬる封月よぬ事名と一字の事いふ事又
一とて人と打しぬる事いふ事

一 ぬ判を付表すぬる事軍の附はぬ筆の人
位たぐひの下の名と書へ一一方とて字
名と書を一ぬる事いふ事
表すぬる事いふ事
奥の事いふ事

一 ぬ人の名と書時奥の事いふ事

何より論

上
吉川左衛門殿

武田強忠殿

武田強忠殿

吉川左衛門殿

一人の致官人主人忠侍輩の方へ書はし
此し時又兼いりぬとて人々お申す一は
ふし地を以披露す一清く一書一光所
家司の名若家司の名とてすくはし
或は所年へは致御屋敷と書へし其の時

一 禮状とて書さるる書田人同様の
坊官の方へまし此田名光所小路名とす
と名の中一兵部御方とて書よとす
一 思謹言是の致書はし清く一書一光所
病状とて書はしと書はし其の思
清く一少名色一とて洗わりの書ありと
真実とて一わらばる色一とて書
信ありと書一真五一書一又光色とて書
書はる尾の花ありと書一兵部御方
一 〇名をさす一判事とて書はし
一 〇名をさす一判事とて書はし

と海と信春とハミナリ〜次又信春の中なる若
白このむら〜次

一 消息之牧〜は一枚先ゆ〜色〜二枚目ハ
紙の〜もち方々書〜三枚目紙の白〜
書消息の〜ハ二行ゆ〜一先面よ〜
〜〜〜〜〜

一 立紙より下と押起らじ事〜と部々舞の
口と書〜て色〜と丸〜と捨〜又洗〜押
平〜下〜はゆ〜と丸〜と〜
と〜雨落〜中〜入ゆ〜と爲〜押平ら

下ハ中よ入〜る落〜と〜
ゆ〜と〜
ゆ〜と〜

一 又書と衣よ判形と衣中〜中袍〜
下〜めて〜中奥端〜
ゆ〜
ゆ〜
て判と〜

一 中書流〜と〜書ハ紙中書〜
一 三織ハ〜
手〜
後前〜

物の元は信元戸入下へ八打行書はくし
二家ハ沙あうりくし書あうりし

一馬と金所一筆ねよと行中りとの筆常の
とくく色一或はうりしハ行須流さる
中と流ハ副あふ中先印と書く同
下印と可書ららうりも同名後同同録
須流さるいりしハ流急変は内あふとあ
又流方ハ雲霧も流もさるくもさる
と中のとくし一帯はハ流も書雲霧さる
書し

一御書長頭戴紅い色さるし人さ方ハ急変の又
章ハ書流も得見是いし人の親類とよ規
さうらひして一書く筆常要知得んし是ハ少
所所わうり書札高知ハ筆常よりハ流高知ハ筆
一又勅より村志合志の通は流流也尚村合知也
又長川をく流之さるりし一筆のよハ
是流流さる高知流流ハ人の流流さるりし高
りしとくし書色一又書流流ハ流書ハ之さ
りしとくし書
一内との流りしとめハ下流下とよむと書

と書こしつゝ又抄下紙右高下可くしきり
也申也由取高回存回章漢里洋谷
高谷舟渡^{白渡}神家方へ七回初又夜津園下
侍衣園下里上りてめ、書こしつゝ或
家年式めを書取^統高取^統河取^統
河也取^統
中輩より書統(由)方へ大内可くは安富助海軍
統川初高(統)河取(統)書統(統)河
河也申一家より下へ書取取河初河奥の
書取方りきつる也つゝ
一 如房又を書取つゝ道のりくもりし書統
と云一と書ハられもよば(統)河一とハ

と書てまよもよめとくハ家より下へ
たり也一又文の表書まの申一取とて用
一取とつゝ用こし略取し取ちめ書とる
く二取の取一取所へめ又もは上書
の書よ月日とちいさく書取しつゝ紙の
と下と同程めら取や文の奥よと取取
とと取よめ一取と取と取(統)河
白取取取河も取と取取取取上取取と下
乃字由もよ可書取取字又も取取と取取
書と又取取のとと取ととととととと

一 送苑の事 梅海棠 白桃 唐桃 又 菊 中々
 水に花 石竹 紅梅 芍薬 紫百合 信梗
 女鳥 ^{若如年} 芍薬 又 藤 吹雪 花
 時よ ころもく 梅 の 花 又 七 又 八
 二 音 豫 ころも 禁 市 花 水 純 小 菊 花 又 二
 又 二 苑 の 用 八 時 よ う り 二 十 又 水 菊
 下 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十
 一 人 小 石 糸 の 字 と 二 十 上 の 字 と 出 二 十
 常 規 下 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十

一 大 一 ち 儀 八 年 以 後 二 十 二 十 二 十 二 十
 軒 酌 あり 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十
 入 道 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十
 一 人 の 色 代 の 事 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十
 狼 藉 あり 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十
 居 所 貴 人 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十
 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十
 但 在 布 の 花 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十
 一 若 人 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十
 當 せ 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十 二 十

音曲ありとせりとの地有古く可成しと云ふ
又字はらりといはの内下は清は要し字は
丸よと云ふのやと云ふと云ふと云ふ
一といひしといひの事と云ふ一といひは
観世と云ふ又云ふ 其後三帝 其の先
は口人の面白し法と一其外日名源は其
又虎菊三帝と云ふ 其の先一人といひ
其の先一人といひ 其の先一人といひ
尺八の又の法と云ふ 其の先一人といひ
かと清はと云ふ 其の先一人といひ

さうらの時と云ふ一其の先一人といひ
八天事一乃中事一其の先一人といひ
半し其の先一人といひ 其の先一人といひ
の法と云ふ 其の先一人といひ 其の先一人といひ
面白しと云ふ 其の先一人といひ 其の先一人といひ
先重なる一其の先一人といひ 其の先一人といひ
も後樂は名可成し其の先一人といひ 其の先一人といひ
の法と云ふ 其の先一人といひ 其の先一人といひ
面白しと云ふ 其の先一人といひ 其の先一人といひ
其の先一人といひ 其の先一人といひ 其の先一人といひ

さー又さよらつらつー半八中同の紋よ
てく人よりすも金所へうたも申同とら次
くー又うらさきの骨とつらあまい人乃
肉元いさ中人うすし小者も若し

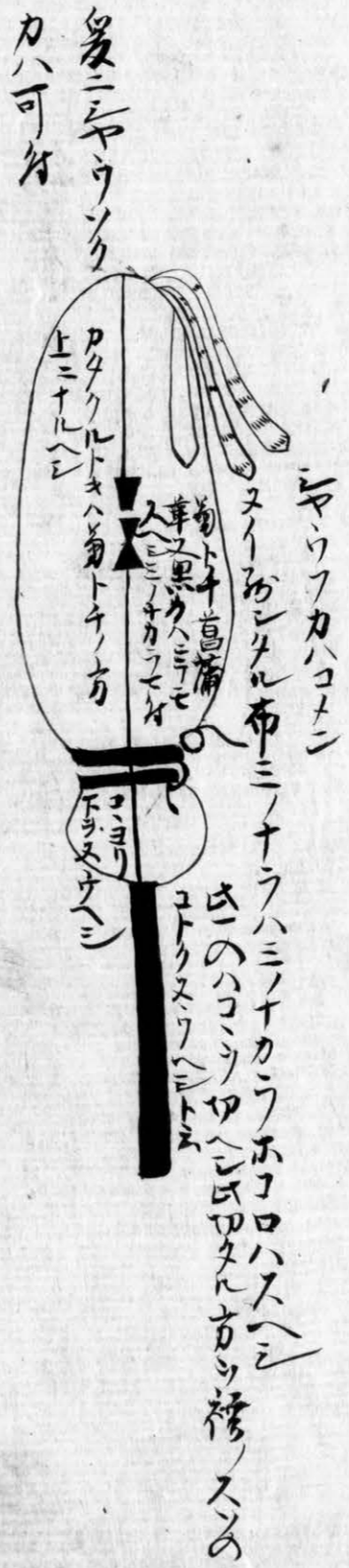
一 呈代名のこーら久松徳の毛さ八呈よらる
色ー上のぬい物すを一尺二寸装束草の
色さ同前 草のまじり 布八呈よらるくー^{まじり}
の又二乃半いもあえくーしうさねらさる
お色ー装束草 高蒲草 こう人あま
うさね色ー高蒲草上こう人なら色ー

草八行を二よとりてらるよあぬいこいあいらも
さねら色ー物らさうらうのよとーい袋
の装束同前又高蒲草あられら草と
うらーあーは但略也又下のぬい物すか
色と一尺二寸とくともなれいふー一尺一寸
寺程よら色ーい袋の一方濃下とつら
してぬー色と月籠公家方ぬい出さる
武家方ぬい色ーい何ーいさる人らこ
袋の二乃下とさうー二のいよつらぬーてぬ
色ーえーい布乃りーと一尺ぬいらる

ちりて入りて繪圖よりしすぬいさ
 ぬいさ利はくぬいさ

菅蒲草ヲキケニサキユニケニサキ

コノモトニテエラヘニハ草菅蒲草ノ黒
 草



折込ニタレコシニ尺計ヌイ合
 入ニ又ハシナカラ旅ニテ旅ナトノ時ハ馬ノ糖シモハ
 折込ニ
 入ニ又ハシナカラ旅ニテ旅ナトノ時ハ馬ノ糖シモハ

二方極之家法申はるくこのりて
 七占晴の村を同前常は清貴は海より
 公家一程は清貴又人の内れに
 今つて物をたかう一わさく人
 一は持て人又りる處一
 十徳とて帯としておろる
 帯にハ人又持るもの
 一は持て人又りる處一
 一は持て人又りる處一
 一は持て人又りる處一

御輿乃時ハ此御輿ヨ入レ常ニ此氣大
人ハ右ニ著ク其氣ハ此中ハ毎度御輿
カクシク御輿ノミナシテ是次右ノ次カ
又右ニ申ク此中ノ凡カ又此様ノ時ハ久
留ハラシニ此ノミナシテ右ノミナシテ
是右ハ新ノノ者トモ此ノミナシテ又
カクシク此ノ水也トモ又カクシク此ノ
時カクシク此ノ水也トモ又カクシク此ノ
ノミナシテ布衣ヲ身ニ著キ勅トモ是カクシク
是トモ用キテ此ノ二但角トモ此ノ作

名字ノ氣子細モイカニ入ルニ未ダトモ此
ミナシテ未ダ名字ノ氣子細モ未ダ意照院
常徳院及大徳ノ此御輿ノ時御輿ノ氣子細
勅ノカクシクノミナシテ此ノ中カクシク
一 雨降ルニ此ノミナシテ此ノ中カクシク
ミナシテ此ノ見及ミナシテ此ノ中カクシク
又カクシク此ノ中カクシク此ノ中カクシク
ミナシテ此ノ中カクシク此ノ中カクシク
此ノ中カクシク此ノ中カクシク此ノ中カクシク
此ノ中カクシク此ノ中カクシク此ノ中カクシク
此ノ中カクシク此ノ中カクシク此ノ中カクシク

中へ入りしに後元とて言ふも一
子し

一 云方後京者とししに脚車十月廿日同程
御成りし二月三日まきく用し雨より道悪
くい迄元と京者と脚車ははきしれく大若
肉元同者又大石見く道と着し時と許と
脚車減しし揚子赤と録のみししと虎形
成変りし

一 同京者六人つ着よりしきくししししし
小大各六人又人程まきくししししししし
しきししししししししししししししししし
十人解きし又云方のく小者三人小房花
としし揚子人志ふ人よりししししししし
解きししししししししししししししししし
唐同京御長刀持とられし夏之門跡の
力志系し又云大足徳のまよとてしつと案
元教ししししししししししししししししし
く方山門跡の力志と腰と系し又八幡と系
の時と布衣乃人御しししししししししし
けししししししししししししししししし

ウニ―走し御と殿上人の御とさるし小
入し又八幡の入口ゆき布衣の人は御成
後衣前のまじりしも戸さしし
廣苑院殿野は遊宮野はし御成に
時々乞流又はは来流は御とさるし
白鳥のさつゆふられしあゆみ傳し
一 御成乃を所ゆりしつふたつ
ゆりし

御成乃を所ゆりしつふたつ
鞍馬高碓久原野小野ゆりし御成志

人うつふとつあられゆりしつふたつ
之よ教とさるしゆりしつふたつ
御成志乃ゆりしつふたつ
ゆりしつふたつゆりしつふたつ
若人ゆりしつふたつゆりしつふたつ
あゆみしつふたつゆりしつふたつ
其時ゆりしつふたつゆりしつふたつ
ゆりしつふたつゆりしつふたつ
ゆりしつふたつゆりしつふたつ
ゆりしつふたつゆりしつふたつ

年のころ人々をさへおとりとらんとすまはせ
らるゝとておとらんとかりとておとせし
又下るおとらばぬとて人事出陣
乃時を告ぐるに

騎馬の事

一 二方後陣よりさへ所々御威の時を御の
人よりさへ石のよみおとせし御
と右よりさへ又御の御威と
お入し又お告ぐとて御威と
らへしとて御威の御威と

右の御威とて御威の御威と
さへしとて御威の御威と
よみとて御威の御威と
一 騎馬の時を御威の御威と
二 二に御威の御威と
一 御威の御威と
一 御威の御威と
一 御威の御威と

又らそくく成りては一日は流る御成のき
なすはまごめく出たてをい脚まごめ家
へ下馬をく出たてをいおとすまごめ
とくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

一
らうつ目録めいぶくく心傳のまじり言く御と
まごめ自伝のまじり言くくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
と石人いしじんくくくくくくくくくくくく
見及くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
おと昔むかしのまごめ

一
馬井の事少踏のまごめと馬とゆくす
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
く方横沙よこさ信吾外しんご時をくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

申持に依は右も為申に人しれたる
なり一房に申は小者なりはくく走へ
又ら家持をられら打口をついし
魚一又らたよの糸し小者の上は利又
小者も敬とて申はび武やうはく
ゆもあさういよも申は同前時めよ
ありふあらし

一
ら家持もあし常行とよはす
又雑色うつふと分るらとあし常行
とさる人なりわ行もあへし抱る

実すトとつとさる成りて
うつふのよ敬とすへし神とす
せもある魚しゆもあもあし大者興の
跡乃右る上の人めたる志流は右よ可
成家よ雑色と申は申間より下腕の者
らりいあらしと家持申間と雑色と
知し又二方後此は雑色と申は別ゆく大
方の人の雑色なりてらりくまらる
腕乃ものうら目とならとあしうつふ
行し女時敬汁腰よす

一 此の道の跡よむと打車は毎の人は小
つこしと見合ふは所はうらうらとさ
るく小者ともひさしのさきとていふ
悪し名合ふはさうとていふは
御信氣見合ふ可なり御信氣

一 御信のこつことていふは
とていふはあつとていふ

一 御成のよとていふは
魚一但しとていふは御信氣
をらとていふは

名意小此とていふは
走し所よむとていふは
のよとていふは
つとていふは

一 御信のつとていふは
の時とていふは
つとていふは
つとていふは
つとていふは

一 御信又社の河のさきには下より二振付
申の事他一金信を及侍降るにとも
ちり下りて刀をふるふ所をいさるよ一各
をいふ事ある事ありしにわづらひ
又おの事あり常より二振付をいさる
と云

一 人よらるるに先く之職其外相俣
元名も及る侍友より同前より先の所を
りしに相俣元の内山と名付及京坂を
御先との事と云及大角友同前より

細川右衛門尉河内守元海定元日常事
も武佐の事は是時こゝのれいゆら
あうらるるに若きいふ事

一 川の事一三職御相俣元名も及侍友
ち角友の事一Omoriの事あり
の跡も事せこれ一又ありし事一人の鞍
ありしに若狭の御おろちを及名通る事
元汁いふ事いふにけられしつる色のうら
と云はれし事一當時は先と云いあり
人よらるるに先く之職其外相俣

中令治と相治し又鞍を履く事と鞍
の間の巴も舟に系ぎ力草の中へ身を
上とひるしはくしはるす魚一又常
の人をくさるひめいさしとあうあう
けしとらと用たりけし

一 船中さゆし之事とあまのくさし
二 方横御花とての名あしじとあまのく
葉と下さしとすしと月とあまのく
も念がらうと河とし御所様は歳うくは
のれのみとくさくあし

一 正月廿六日乙未名書紙の時之職計御方令以
進上し廿八日乙未名書紙御首おをまし
後廿八日幅とあまのく又細川漢治又進上り
より御筆懸川日朔日乙未のく持来し
御首おをまされし是に御首おをまのく又
御代始つ下の御祝書の時治家うるとと
うる日乙未のく具足名目乙未とくく後
く承し車よつとく首治る御
一 正月祝銘の事申朔日時の官領 治る者二日
大角女 治る者 三日乙未又 治る者 七日乙未又 治る者

し録のゆかりとらうあしとらうつま
又今日小神の巻とさうゆつとらうあし
一 内禮仙洞少くも家系に我ら年と般と
花鳥井申納言入道又信と非度と信と
しとさし人のふととも日露もあし親を
とらうとらうなれあしは作し親王家持家
門跡少くも此分にしとさ家にしてと家
まは貞宗納言とわれとわれのしと家
ことばはゆし武家とさうとらう事とあし
但二階堂又八政行とはくはとらうしとれ

もと家系と一若しとの事少くも又と家少く
外記官勢陸陽師其外賀茂元以下とは
皆必書名ははくはしとらう挿入次は
の財とはかおし但賀茂の元と内松下と
しと家系とらう

一 常徳院教沙代と人遊の細くさるらう元
七間の止脱の前のせとさ庭と縁といは
られては親方古しとらう人教藤申納言
金保と現列^お小室宗氏と揚文徳同徳^お
小室宗利と揚文^お来^お併^お和^お江^お宗^お亮^お
とらう

後金仙所少くも是より少くも是つる人の
内流の細川及秋庭傳守元重泰長伯前百
子賢豊後守之志と云かし一豊後公存之
談見りとはいつる馬の真加面月にく
いりき申にし又お上常の時子布施下野
りしくしら道し一又お上常の時乃人お上常の時乃人
大館入道常具の事の外我小兄弟
はる和さあし

一 文華二年の江御相傳元御供元以下事

菅領島右衛門 細川九島元 山名右衛門元

一色左衛門元 細川普光元 赤松普光元

在國流

治部少輔元 島山左衛門元 赤松元

大内元

御供元

細川大馬元 島山右衛門元 島山之島元

大館刑部元 赤松元 赤松元

細川氏元 島山元 富樫元

赤松元 赤松元 赤松元

申次

大館刑部左衛門

島山刑部左衛門

津波子左衛門

津波子左衛門

左之元

後者左衛門

後者左衛門

小津下總守

遠山左衛門

長下左衛門

廣田左衛門

一 菅原左衛門

赤松左衛門

松平左衛門

一 東光右衛門

島山左衛門

津波子左衛門

細江左衛門

申次

大館刑部左衛門

島山左衛門

津波子左衛門

津波子左衛門

左之元

後者左衛門

同朋左衛門

一 常徳院殿 東御所 三 相傳元 法元常のこき

申次

大館法補元 上野民部卿 法元常の自筆

法元常の自筆 法元常の自筆

法元

一 竹葉丸 糸巻丸 唐戸判 忠右衛門 忠右衛門
忠右衛門 忠右衛門 忠右衛門 忠右衛門
忠右衛門 忠右衛門 忠右衛門 忠右衛門
忠右衛門 忠右衛門 忠右衛門 忠右衛門
忠右衛門 忠右衛門 忠右衛門 忠右衛門

一 三行標 法元常の自筆

法元常の自筆 法元常の自筆

法元常の自筆 法元常の自筆

法元常の自筆 法元常の自筆

法元常の自筆 法元常の自筆

法元常の自筆 法元常の自筆

法元常の自筆 法元常の自筆

法元常の自筆 法元常の自筆

法元常の自筆 法元常の自筆

一 乙方様より諸家の送し日原の乞言の事
申し合又小川合と申す一夜の事一書に
と書て送るは好と書魚一御使の事新公家の
迎湯の二条五二条又自自在九条五八の事
少方新業より後し其日野五二条五八門跡
御室の御遣院青蓮院宮親院大寺より
多分是と書後し三宮院武家の新公
細女島女は外山女一色女後成字島
左代女赤松女大内女赤松女吉良女島
濱女菅領女母の事と書お入りお入り

一 送し御使乃礼よ武家院御使
一 一かへ乃たのじい白あき七月晦日
一 八月初日よあき一又八月より送の礼の
一 一よ又よ一として一今初日の事
一 一ころを物事申し
一 十月亥子の時御使あきより切とて人
一 のやあきりらあきれば武の面々
一 人よりあきりらあき又あき乃時諸國
一 御前にて元治の人の方次第として
一 出しそのはと書一はらちしと書

國を治まるといふ所へ下濟の帝はけ
 由れし方のいと切なう帝はけは道
 らくハ川合一重むつ由れし包ちり
 籠ち又いに大君のこころ下濟の帝は
 ちれし包紙上蔭ちり沙復めく包帝の
 上を秘系一りさ秘めく包はしこて一り
 次も首人ゆつせられ

一 之儀いのちの御事の御門前には必ず馬を一人御儀
 儀の時に御門あきまうとされはしむ
 一 一凡のぬ何を下る花中親めく者ち

しき

一 路次はくまよとあま二儀は赤倉を下る
 してくれの口後しきこころを
 ころ赤くは礼の御相伴えたる方
 同前御赤坂友太周友赤坂はとあか
 ころは礼はら出てる内にはあは
 まし礼はさ首のあか一りあか
 時の事はあれは別ありんか
 一 之儀へされは赤時礼は使と縁し赤は使の
 赤は人といつて礼とてり赤の相伴

元回前個人より一人

一 帝王の心こそ一のさなりけり（片言）の心こそ一人

やまのいとしな名も法もせられし其より

心こそ一の心（片言） 心こそ一の心

人に心よおれしとせし心こそ一人一軍同利

一 浮世へ来ると来るとし一福を社系とも無

時へ来流と一智成とは下と一戸小野

とハ文と一戸又聖廟と一

一 古人の心と一

一人の心と一ゆゑ人の心と一

それらの心よある處ありは後多と一人いかに

堯舜夏禹殷文王武王周公且孔子と

卯のありは一々聖人と一々世のありは

乃家人とゆゑ一日本に一聖徳の子孫

テラスと一々一と一々一聖人と一

心と一の心よある處ありは後多と一人いかに

さしと一ありて日月乃徳と一一人の心

の心と一の心よある處ありは後多と一人いかに

と一ゆゑ人の心と一ありは一々聖人と一

心と一の心よある處ありは後多と一人いかに

ことごとく思ひよるに國の爲民乃爲りよ
くもたすの爲に也すも人々をいひては
しるべき事なり一はよりいふべしと持事
ありてはたよるべき能はくすこと也
ゆへに利道理とて事一と極の備
はあつてあつてはたよるべき人なかくし
たり若はたより親とてやまひ先事の道と
たふし朋友志礼はたよるべき能はくす
阿しとすも事つる者と賞一科なる
者とほりつるものもたよるべき能はくす

よる名刺とぬすはす我意法よりくせば家
事もあつて一はよりいふべしと持事
ありてはたよるべき能はくすこと也
ゆへに利道理とて事一と極の備
はあつてあつてはたよるべき人なかくし
たり若はたより親とてやまひ先事の道と
たふし朋友志礼はたよるべき能はくす
阿しとすも事つる者と賞一科なる
者とほりつるものもたよるべき能はくす

竹の葉もや聖人の文も平ふ一なるものぞ

利

一 又孝のいこくして唐の初事とていふ

それよりのよき人の徳もあらわす

徳にあらざる人ならざるをいふ道

理とていふらるる事一は家の人をいふ

いふは孝のいふ事と道理のいふ事

向ふ人との徳一又小糸の政とていふ

多しなる事とていふ一孝のいふ事

なる事あり一孝のいふ事 政要は武系

なりと物なりとていふ事とていふ

一 徳のいふ事と徳のいふ事

約一は徳のいふ事と徳のいふ事

事なる事とていふ事とていふ事

の事とていふ事とていふ事とていふ事

とていふ事とていふ事とていふ事

とていふ事とていふ事とていふ事

とていふ事とていふ事とていふ事

とていふ事とていふ事とていふ事

とていふ事とていふ事とていふ事

うへにたてしむるは海に舟を
流し舟をたする者にして舟に凍
言の國をたす人といひしは口し

りし利

一 或抄物より新とる人の約とす事の
堅ゆるはまともぬ。東ノ貴人の院宣は
と信文ゆへ武士のたすむるは義村の
物居とこれなるはしとの國めと盟と
申て牛の面は音へ記法文にあらは
略約よりしとて一揆にあらして

の事ゆりめをたする者とはすしを依
人に賣とらる事なるはしを申し唐國
めと盟の礼なるはしは牛の面とと
音なりともはしを申しはめさ
さりまもはしはしはしとて人の
あまを初の一揆にあらはるるは
みれ小にあらはるるはし者のはし
り書とたりしはしとてはしを
めしはしを申し盟とす事とて合戦の時
の事ゆりめはしはしはしはしはし

とまのりつるをまたひりさしはる事
のまのりつるをまたひりさしはる事
一人のりつるをまたひりさしはる事
ありきあり井のりつるをまたひりさしはる事
まのりつるをまたひりさしはる事
のりつるをまたひりさしはる事
のりつるをまたひりさしはる事
のりつるをまたひりさしはる事
のりつるをまたひりさしはる事
一人のりつるをまたひりさしはる事

はる事とまのりつるをまたひりさしはる事
これに門をりつるをまたひりさしはる事
若しとまのりつるをまたひりさしはる事
ゆりつるをまたひりさしはる事
ありきあり井のりつるをまたひりさしはる事
まのりつるをまたひりさしはる事
のりつるをまたひりさしはる事
のりつるをまたひりさしはる事
のりつるをまたひりさしはる事
のりつるをまたひりさしはる事
一人のりつるをまたひりさしはる事

用多し云下志入るによしあり

一 唐の文書は西國の日記ありて流言と云ふ
申成りありて西國の日記ありて流言と云ふ
さしと云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
と云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
ゆと云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
御門日記ありて西國の日記ありて流言と云ふ
さしと云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
て流言と云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
一 西國の日記ありて流言と云ふ

一 西國の日記ありて流言と云ふ
と云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
ゆと云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
御門日記ありて西國の日記ありて流言と云ふ
さしと云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
て流言と云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
一 西國の日記ありて流言と云ふ
と云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
ゆと云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
御門日記ありて西國の日記ありて流言と云ふ
さしと云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
て流言と云ふなりて西國の日記ありて流言と云ふ
一 西國の日記ありて流言と云ふ

一ツの女に父よといひ人よにりてを
 可川と名せりといひては子よといひてを
 之流とて一深氏物語の事とに云ふことと書
 可ま川女といひてを屋つらうあつて一はを
 くは日な国ハ和出といひての事と云ふ人よ
 也云照る神と女祈めりつらうと云ふ事
 上神切里后も一は幅大言菩薩志
 の母めりつらうと云ふ事一新羅百濟國
 也と云ふ事一は昔原の國と云ふ事と云ふ事
 又昔と推古天皇と云ふ事一と云ふ事と云ふ事

ちく物乃政はたこころい結一付聖徳太子
 物語一といひ一十七ヶ条の事と云ふ事
 ちよと云ふ事一皇始物語の事と云ふ事
 と女神めりつらうと云ふ事一は女
 ちよと云ふ事一は女と云ふ事
 一と云ふ事一は女と云ふ事
 と云ふ事一は女と云ふ事
 將軍の母と云ふ事一は女と云ふ事
 と云ふ事一は女と云ふ事
 貞觀政要と云ふ事一は女と云ふ事

ゆりし麒麟八角濃上も関河家より
てしるすい何ともしも人の子をすすむ人威
おれもまたもあすとの命をけりけり武乃
道威鏡かたあはれとて去徳とすすむの威勢
とていふをさうりよなきもあす少事うり大
事と成すすうりなきとていふせめあはれなき
人関河とてなき事ある一少事とていふ
道威鏡かたあはれとて去徳とすすむの威勢
とていふをさうりよなきもあす少事うり大
事と成すすうりなきとていふせめあはれなき
人関河とてなき事ある一少事とていふ

魚

一 運の所成とていふ人輩ハ罪科も
せり家へ一代に成すの正例ともいふ
義者とていふて初教も准していふや
お退治の仕法も可なる事理のさす所なる
いふこととていふもあすいふもあすし
いふも先相と梅菜鏡申すようりあすも
とていふ暗れは又これの道あり一これ又
とていふ初めさうりよなきもあす少事うり大
事と成すすうりなきとていふせめあはれなき
人関河とてなき事ある一少事とていふ

とくしと利にかなる人として難成業
あししきしと道徳のなる人申儀
ましき申なる人しと申の事とお
らく徳をその所と家ほくまをい
一人のしきまをいしと人志なれば
幸甚は家なるいしと所所成り人
民の爲天下の爲と成りしと好ま
者なり利揚る者も相成程少くしと
いしと徳と諸人あつとこしと
福あくとるやゆしと徳を計しと佛

神のいしと徳に成りしと徳に成りしと

一 徳に成りしと徳に成りしと徳に成りしと

徳に成りしと徳に成りしと徳に成りしと

徳に成りしと徳に成りしと徳に成りしと

徳に成りしと徳に成りしと徳に成りしと

一 徳に成りしと徳に成りしと徳に成りしと

徳に成りしと徳に成りしと徳に成りしと

徳に成りしと徳に成りしと徳に成りしと

徳に成りしと徳に成りしと徳に成りしと

天母也（奇）いさむらじもなまのりしすれ（奇）花母
海しりかきつらりしりすりなりしりりり
守りつるはと我とえ礼の君とくし
さき子と親母孝し身ハ見よとくし
むらとみくしにしりりりりりりり
しりりりりりりりりりりりりりり
花りくもりりりりりりりりりりり
百の歳と少りりりりりりりりりり
るる大方と夜思りりりりりりりり
と知ると信りりりりりりりりりり

く通母りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりり
是の信りりりりりりりりりりりり

是花母文と自事と同書達又落字と
へりりりりりりりりりりりりりり

次高殿

下巻入道
宗文
辛巳歳

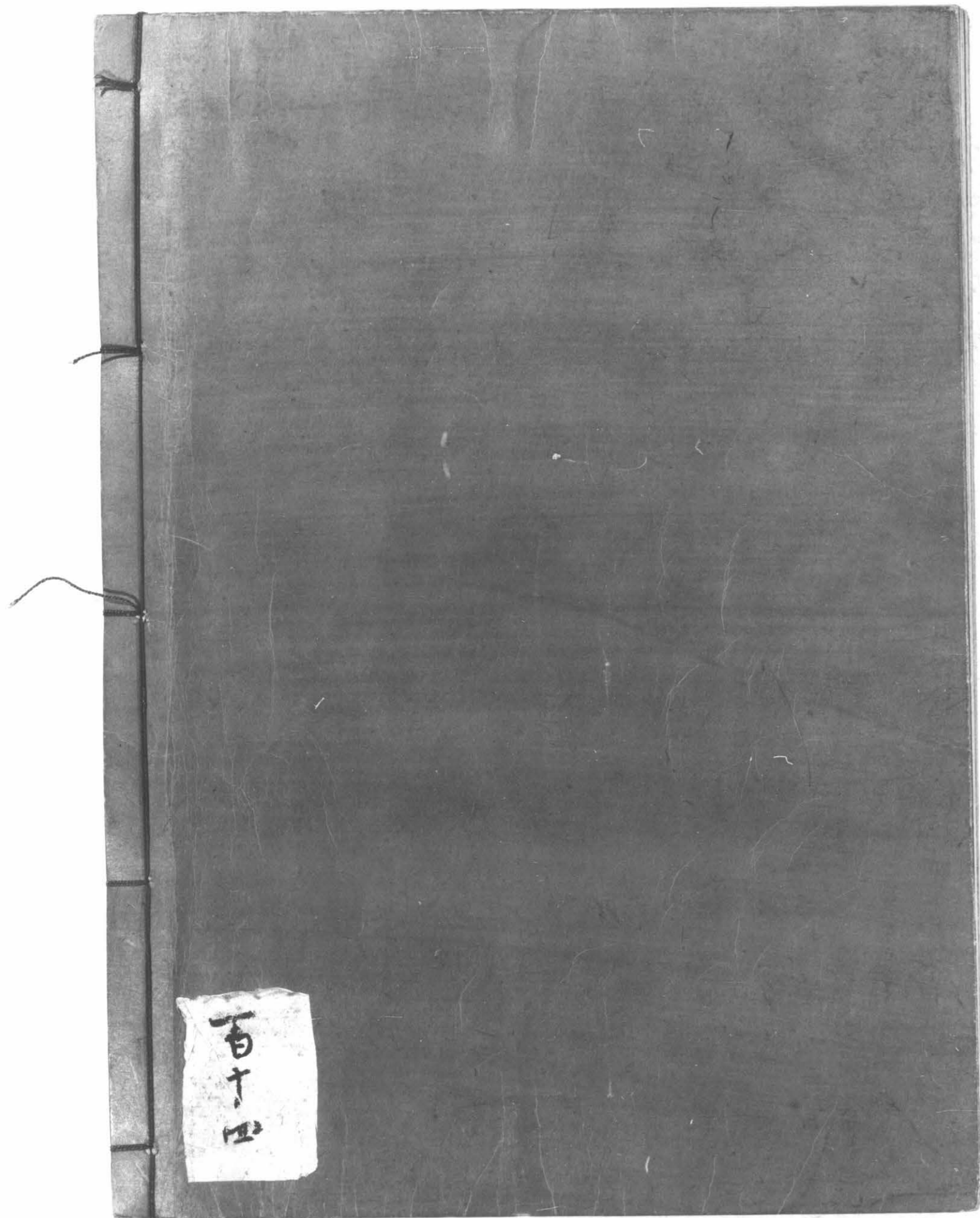
右第大符印柳新傳之字之也
道一系不及是地也
下甲系亦老之理也
所新字之字亦在
可以合之也

天七安九於安境之可市字之者也

右之次書系自第之字書之
分按今年

三

九州大學圖書印



百十四